ブレンネル峠の今昔

長谷川久一

西紀一七八六年九月三日カールスバードの溫泉場から出發して一路伊太利へと志した文豪ゲーテが通つたブレンネル峠は、今や世界全體の耳目をそば立てしむる兩巨頭の重大會見の地點そのものである。而かもここがゲルマン民族とラテン民族との間の文化交流の關門であることに於ては、決して今も昔も變りがないのである。ゲーテの見たもの、ゲーテの觀察したものは勿論十八世紀の伊太利である。併し彼の觀察研究は伊太利の眞髓に迫り伊太利といふ國の現はす不滅の相、伊太利人の變らざる國民性、其の民族の性格を洞察し、今日獨伊提携の礎となつたものである。ゲーテは固より獨逸人であつて伊太利人にとつては外國人である。併しゲーテの愛、南國伊太利についての强烈な愛は決して誰れにも劣らない。伊太利より彼が受けた影響の大いさは世界文學史上に於てゲーテほどに巨大なものはないであらう。伊太利について心からの愛と理解とを有ち、熱誠をこめて研究し、旅行した世界的人間ゲーテの伊太利についての記錄は、それ故に不滅の價値を有するものである。ゲーテと伊太利といふ問題はまた獨逸と伊太利といふ問題になり、更に進んでゲルマン民族とラテン民族といふ考察へと導いて行く。ゲーテの藝術によつて代表されるゲルマンの藝術文化、伊太利が示すラテン藝術文化、その比較論評はまた北方文化と南方文化の對立融和といふ世界史的な問題へ進展して行くのである。

ゲーテ時代に於ても北部伊太利チロル地方、墺太利に近い國境方面には獨逸語が相當に行はれてゐた。ゲーテもその紀行中に北部伊太利チロル地方について、ボーツエン、トリエントの町々ではまだ獨逸語が通用し、ガルダの湖のほとりで始めて獨逸語から伊太利語への變化が明瞭に判かり、記者は純粹の伊太利語を語り、旅館の主人は獨逸語を解さないと記してゐるほどである。ゲーテがガルダ湖畔のマルチエシーネの古城でスケッチしてゐた際に、

墺太利から派遣された國境偵察者と疑はれ、澤山の民衆に取り圍まれ判官から訊問を受けた記事が、また紀行中に面白く書いてある。彼はマルチェシーネの古城を記念するため其の古塔を描いてゐた。すると民衆は次第に彼の周圍に集つて來て騷ぎ出した。遂に判官と隨行の書記とがやつて來て色々と問ひ尋ねた。此處はヴエネチヤ領と墺太利皇帝領との境界になつてゐるので偵察されてはこまる。ヨゼフ皇帝は物騷な君主でヴエネチヤ共和國に對し、色々と計畫してゐると言ふ。ゲーテは卽ち墺太利皇帝の臣下で國境偵察に來たものと見られたのであつた。併しゲーテは流暢に語つてその疑を解いた。彼は唯この城趾とその風景の美に魅せられて繪を描いたこと、彼は自由都市フラクフルト（マイン河畔）の市民であること、美術研究のために伊太利を旅行することを明確に述べたてた。その中にフランクフルトの市に曾つてゐたことのある男が呼ばれて來て、ゲーテの爲めに辯護し、色々と有利な證言をしてくれたので判官その他の嫌疑も霽れて漸く宥された。之は伊太利旅行中でも珍らしく、ゲーテが軍事偵察者と疑はれた興味深き事件であるが、その他に於ても種々の事件がないでもなかつた。外國を一人で旅行するときには色々の不便や苦勞を忍ばねばならない。新らしい異國の風物や鮮かな魅力を以て押し迫り、その人の觀察研究心を燃え立たせる代りに、自分は今、外國にあるのだといふ緊張と注意と固い決心が必要である。それにはゲーテは伊太利語に修熟してゐたから、伊太利の各地に於て自由に且つ流暢に伊太利語を話し、民家に能く親んで自ら伊太利人に同感しつつその旅行を樂しんだ。彼はかくして南國の自然藝術を喜び、まるで自己の故郷に於けるが如き感じをもつて伊太利の生活に入り込んだ。その溫和な氣候、單純な自然的生活は彼を喜ばした。ゲーテの如き悠々たる心をもつた寬容な世界的人間にして始めて伊太利の自然藝術のみならず、あらゆる文化現象一般に對して、深い理解と廣い觀察研究とが出來たのである。ゲルマン民族とラテン民族といづれが優秀か、獨逸の文化と伊太利の文化といづれが勝つてゐるか、各國民は夫々自國の優越を誇つて讓らないであらう。各國民各民族は違つた國土の上に全く異つた樣式の藝術文化を生み出すのである。北方文化と南方文化、或は北方藝術と南方藝術、之等は民族、國土の相違から全く異つた樣式として、その特長を把握しつ比較論評されねばならない。餘りに偏狹な愛國心を有つ人、自國の文化のみを獨り高しとする人にとつて、往々外國の觀察は輕蔑憎惡に陷り易いが、ゲーテは自己形成につとめ、自らの敎養のために情熱的に精進して、永久的な伊太利を見、何百年何千年も變らざる伊太利の眞の姿、伊太利そのものを見んとしたのは確かに偉とすべきであつたのである。

ゲルマン文化とラテン文化との比較對照は、僅少な論述で之を解き明かすべくもないのであるが、要するに存在に立脚するラテ

ン文明、形式的な羅馬法王に對するゲルマン民族の果敢な反抗はルッターの宗教改革が先づ以て著しき對立のあらはれである。かくしてルッターの精神的遺産は爾後引き續いて獨逸民族の血肉の中へ流れ込んだ。ラテン民族が誇る造形美術文化に對する反抗として現はれたのは獨逸音樂である。獨逸民族は由來音樂的であつて造形藝術的ではない。伊太利及び佛蘭西が第一流の畫家、彫刻家を無數に輩出せるに反し、獨逸は未だ曾つて世界的な令名を博する第一流の畫家、彫刻家を出したためしがない。獨逸民族はラテン諸民族に對して造形藝術に於ける貧困を嘆かねばならない。併しその貧困を補つて餘りあるものは、即ち獨逸音樂の豐饒である。バッハ、モツアルト、ベートーヴエン、この三人の名前を擧げれば即ち足りるであらう。他の如何なるラテン諸民族がかくの如き音樂の大天才を生み出したか、獨逸音樂文化の豐かさに對しては、他のラテン諸民族は頭を下げねばならない。獨逸音樂はまさしく獨逸民族精神の生々とした明らかな表現である。絶えず生成發展し、流動しつつ限りなく流れる無限旋律、この上に築かれる無限なるものの藝術こそ音樂であり、それは獨逸的本質の生ける藝術である。ゲーテの出現する以前の十八世紀の獨逸はまだフランス文學の影響の下にあり、ルイ王朝の華美絢爛たるロココ藝術の影の中に在つた。また伊太利デカタンスの變形した奇怪異樣なバロック藝術の羈絆を脫し得なかつた。眞の意味の獨逸文學を興して之を建設樹立したものはゲーテである。伊太利も佛蘭西も夫々文化の華を咲かした十八世紀に於て、獨逸はまだ之れ等ラテン諸民族を凌ぐほどの藝術文化を有つてゐなかつたのである。この時に當りゲーテは伊太利を旅行して、彼等が獨逸について何も知らないのを見出して驚いてしまつた。何等他に向つて誇るべき敎養を有しない十八世紀の獨逸文化を救ひ、之を補充する必要を痛感したのは實に當然のことであつた。ラテンの形式を取り入れて以て獨逸精神と融合させ、澄み切つた獨逸的形姿を生み出すこと、之がゲーテの中心理念となつた。而して獨逸國民文學より世界文學への發展、それを身をもつて實現したのがゲーテである。ゲーテが伊太利に於て情熱的に古典藝術に心醉してゐた時も、その底には烈々たる北方民族の氣慨が漲つてゐた。ラテンの形式模倣に終らないで、その眞髓を抽出し以て獨逸の國土に移植するといふことが彼の重要な役目であつた。ゲーテは伊太利旅行中行李匆忙の間にあつてもその作品の改作や推敲を怠らなかつた。散文イフイゲーニエは既に伊太利旅行以前に完成してゐた。併し韻文のイフイゲーニエは伊太利旅行の賜物である。この改作が出來上つたときゲーテは之を故郷の友人に送り、心からの喜悅を以てこの作品の完成にいたるまでの苦心のほどを詳しく報じてゐる。ゲーテがブレンネル峠を通り越したとき、その草稿を一番大きな行李から取り出した。ガルダ湖のほとりで烈しい南風が波を岸にう

ちつけたとき、新改作の最初の線を引いた。「そこでは私は少くともタウリスの岸邊に於ける私の女主人公と同じ位に寂寥をきはめた」とゲーテは記してゐる。ヴエロナ、パドヴア等に旅しても熱心に改作を怠ることはなかつた。ヴエネチヤを經て羅馬へ來ても勞作は間斷なく繼續された。「夜寢につくときは、明日の課題に對して準備し、翌朝眼が覺めると早速それに着手した」とゲーテは書いてゐる。ゲツツやウエルテルの如き激烈な突進的なものと違ひ詩的散文で書かれたイフイゲーニエやタツソーを同伴者としてゲーテは美しい暖い伊太利の旅へ連れて行つた。これによつてゲーテは再生した。ブレンネル峠に於て會見を約したヒットラーはムツソリーニとの間に打ち合せを遂げて、獨逸の今年のプログラムは多大の生氣を添へ得たであらうことは想見に難くはない。スペングラーの「西歐文明の沒落」の中に、アメリカの富裕階級の伊太利旅行者がヴアチカン宮のシスチヌ禮拜堂の壁畫を見ながら理解せずに通り過ぎてしまふことを痛罵してゐるが、アメリカの有識階級もこの際伊太利を大に見直す必要があらう。かくして弗の迷夢から覺め、眞の文化人に立ち返らむことを望まざるを得ない。シルレル作群盜劇の主人公カールも、「熱情を恣ならしめずして、之を制するところにぞ、眞正の自由は存する」と謂つてゐるではないか、自由の國アメリカも亦しかあらむことを懲通してやまないのである。

——一八・三・一〇——

若葉吟社詠草

若芝の野面晴れて驛の遙かなり　蕗邨
風起てる空塵舞へり春旱　同
窓を射る日脚明るう爐を塞ぐ　同
麥隴の一望白し春旱　農鳥
爐塞ぎて長々と臥し讀み耽る　同
春の雲藍一色に溶けてけり　東邊僕
若芝に素足ぬくとし子と遊ぶ　同
峠越えるバスのほこりや春旱　靜風
城壁に歩哨動かず春の雲　同
屋根ごとに白き埃りや春旱　翠山
父母の話淋しも爐を塞ぐ　同
靈峰の裾になびきぬ春の雲　靜如
爐塞ぎて寒き一と日よ早や暮れて　夢香

○

苗床の伸び芽焦げてや春旱　野狐禪
繕へる釣の道具よ爐塞いで　同